

いつまで5年に一度のシステムリプレイスに大騒ぎする のか？ IBM が提案する“魔法の箱”とは？

情報システムには、時代が移るにつれて変えていくべき部分と、変わらない部分がある。それをきちんと理解しないまま拡張・刷新していると、新テクノロジーをいち早く導入して「攻め」に転じることもできなければ、高い運用負荷に支配され続け、コストを下げることもできない負のスパイラルに陥ってしまう。しかし、こうした課題を解決できる「魔法の箱」があるという。日本アイ・ビー・エム IBM システムズ ハードウェア事業本部 ハイエンド・システム事業部 Power Systems 部長 久野 朗氏に話を聞いた。

ビジネスの脅威は業界の外からやってくる



日本アイ・ビー・エム
IBM システムズ ハードウェア事業本部
ハイエンド・システム事業部 Power Systems 部長
久野 朗氏

——企業の方々と対話される機会が多いと思いますが、昨今のビジネス変化をどのようにとらえていらっしゃいますか。

久野氏：企業の経営層の方々のお話を伺うと、昨今は業界の外からやってくる“ニューカマー”が大きな脅威だとおっしゃいますね。車を1台も持っていない配車サービス事業者、客室を1室も持っていない宿泊サービス事業者、自社開発コンテンツを持っていないWebメディア事業者、こうした企業が彗星のように現れて、あっという間に時価総額で自社を追い越していく…。その攻勢をどう防ぐか考えると同時に、自社も“ニューカマー”のように攻めていかねばならない、と考えておられるようです。

いざ、「攻めるぞ！」となったら、そのときこそITの出番です。しかしそこで、モバイルや、クラウドなどの最新技術を実装しようとしても、今持っている情報システムとはまったく乖離していて、モノも、人も、一から調達しなければならなかったり、標的型攻撃などを始めとする新手のハッキングといった、日々複雑さを増すセキュリティの脅威にさらされては、その防御に四苦八苦されているなどのお悩みをお持ちのお客様が多くいらっしゃいます。

情報システムには、いつの時代も変わらない“不易”の部分と、時代の潮流につれて変化しなければならない“流行”の部分があり、その双方において、多くの企業が課題を抱えているといえます。

——“不易”の部分にも課題はあるのでしょうか。

久野氏：あります。会計システム、人事・給与システム、販売管理システムなどといった基幹システムにも、法改正などに合わせて変更しなければならない部分がありますが、基本のアプリケーションロジックはそう大きく変わるものではありません。

しかし、x86系サーバーを利用されていますと、ハードウェアの保守契約が概ね5年程度のサイクルで終了になりますから、その度にシステムを再構築し続けていかねばなりません。ハードウェアが変わると、それに対応するOSやミドルウェアのバージョンも影響を受け、それぞれにアップグレードが必要となります。そして結局、アプリケーションパッケージにもバージョンアップが必要で、そこにカスタマイズをほどこしてたりすると、システム開発費用までが都度発生するという、終わりのないサイクルに巻き込まれ続けることとなります。つまり、ビジネス上の利点は何もないのに、ハードウ

エアの保守契約が終了するというだけで、定期的な多額の出費を余儀なくされてしまいます。